総務大臣賞

山林と都市を税でつなぐ試み

山梨学院中学校３年
疋田　櫂

マウンテンバイクで櫛形山の山道を走り下りるのは、最高にスリリングな体験だ。スキーや登山とはまた違った、自然の中に自分を投げ込むような気分が味わえる。先輩たちと一緒にスコップで掘り、飛び跳ねて踏み固めたコースには、樹冠の枝葉の間から木漏れ陽が差し込み、吹き抜ける風に下生えのシダが揺れ、小鳥がさえずる。ここは夏でも涼しいエアコン要らずのスポーツフィールドだ。

けれども、私は見て知っている。山梨県内の多くの山林は、このように美しい景色からは程遠くなりつつあることを。かつて林業で栄えた地域でも、山林から出荷する材木の価格が落ち込み、伐採や植林にかかる費用と見合わなくなってきたため、儲かる見込みがなくなったと判断されてしまうと、間伐や枝打ちもされなくなる。結果、ひょろ長い木が密集した、異様に暗い森になり、下生えも育たず、木は病害虫に侵され、降った雨はしみ込まずに土砂とともに斜面を流れ下る。こんな山林では、何年後か何十年後かはわからないが、いずれ必ず、ふもとの市街地へ水害や土砂災害が襲い掛かることになるだろう。山林に囲まれた甲府盆地では、治山なくして平和に暮らし続けることはできないのに、みんな気づかない振りをしている。

この悪循環、地域の暗い未来を変えるために、新しい税金ができたと聞いた。その名は森林環境譲与税。来年から、全国でおとなほぼ一人当たり千円の森林環境税を集めて、六百億円の財源をつくる。そして間伐などを行う市町村やそれを支援する都道府県に配る、つまり譲与する。これは要するに、都市に住む多くの国民に、遠く離れた地域の林業を一緒に支えてもらおう、という試みだ。都会に住む人は、「そんな山林、自分には関係ない」「うちは木造じゃなくてコンクリートでできている」「こんな税金払いたくない」と感じるかもしれない。でも、そうではない。山林は、木材の供給源であるだけじゃない。水源であり、二酸化炭素の固定先であり、災害を防止する防災基地でもあるからだ。それどころか、「森は海の恋人」、つまり海の魚や貝や海藻ですら、山林からの恵みを、川を通じて受け取って育っていることがわかってきた。そもそも山と川と海は、大きな循環を担うひとつの生態系だと考えた方が、おかしな間違いを繰り返さなくて済む。

今、日本の山林には伐期つまり切りごろを迎えた木材がたくさんある。これをちゃんと切って使い、代わりの苗木を植林していくことで初めて日本は持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）を達成できる。森林環境譲与税は、都市と山林を税でつなぎ、山と川と海の絆を結び直す、壮大な試みだ。これが成功し、少しでも多くの山林が、あの櫛形山のトレイルのように美しく快適で健全な森林環境を取り戻すことを、私は願わずにはいられない。